シトクロム の多量体形成におけるアニオンの影響に関する理論的研究

¹ 琉大院理工,² 九大院理,³ 奈良先端大,⁴ 琉大理 ○根木秀佳¹,吉田紀生²,廣田俊³,東雅大⁴

Theoretical Study on Anion Effects on Oligomer Formation of Cytochrome c

OHideyoshi Motoki¹, Norio Yoshida², Shun Hirota³, Masahiro Higashi⁴

¹ Chemistry, Biology, and Marine Science, Graduate School of Engineering and Science, University of the Ryukyus, Japan

² Department of Chemistry, Graduate School of Science, Kyushu University, Japan ³ Graduate School of Materials Science, Nara Institute of Science and Technology, Japan

⁴ Department of Chemistry, Biology and Marine Science, Faculty of Science,

University of the Ryukyus, Japan

(Abstract) Cytochrome c (cyt c) forms oligomers by successive domain swapping, where the C-terminal helices are replaced by the corresponding helices of other cyt c proteins, and loses its electron transfer function. The amount of oligomer formation depends on the chaotropic and kosmotoropic nature of the anions. However, the detailed mechanism is still unclear. We have been studying the thermodynamic stability of the domain-swapped dimer of cyt c by using the molecular dynamics (MD) simulation and the three-dimensional reference interaction-site model (3D-RISM) theory. In the present study, we investigated the anion effects on the stability of dimer. We calculated the enthalpy difference in aqueous solution, 1 M NaCl solution, and 1 M NaNO3 solution. The calculated results are in reasonable agreement with the experimental ones. It was found that structural change induced by the anion plays an important role in the stability of dimer.

【序】 シトクロム cは、シトクロム bc1 複合体からシトクロム cオキシターゼに電子 を伝達するヘムタンパク質であり、多量化することでその電子伝達の機能が失われる ことが知られている。近年の研究から、シトクロム c は互いの C 末端ヘリックスを交 換するドメインスワッピングにより多量化することが明らかになった(Fig. 1) [1]。ま た、多量体の形成にはアニオンの種類と濃度に依存することも明らかになっている [2,3]。しかし、これらの詳細な理由は明らかになっていない。

これまで我々は、この多量体形成のメカニズムを目指して、分子動力学シミュレー ション(MD)と液体の積分方程式(3D-RISM)理論を用いてシトクロムcの単量体と二量 体の熱力学安定性について解析を行ってきた[4,5]。これまでの研究で、周囲の水溶媒

が二量体の安定化に重要 であることを明らかにし ている。本研究では、さ らにアニオンの影響を解 明するために、様々な溶 媒中のシトクロム c の単 量体と二量体の熱力学的 安定性の解析を行った。



Fig. 1. Domain swapping of cytochrome c.

【計算方法】本研究では、単量体と二量体のシ トクロム c の初期構造はそれぞれの X 線結晶構 造(PDB code: 1HRC, 3WUI)から作成した。MD シ ミュレーションでは、単量体では 2 個、二量体 では 1 個のシトクロム c を一辺が 110 Å の立方 体のボックスに配置し、系を中性にするために CIイオンを加えた水溶媒、1M NaCl 溶液および 1M NaNO₃溶液を用意した(Fig. 2)。分子力場とし て、タンパク質に Amber ff99SBildn を適用し、 ヘムに Amber GAFF を用いた。単量体と二量体



Fig. 2. MD simulation systems.

の構造でそれぞれ 100 ns 平衡化、10 ns サンプリングの MD シミュレーションを初期 条件を変えて 10 回行った。3D-RISM では、MD シミュレーションで得られた 5000 個 の構造から水分子とイオンを取り除き、MD シミュレーション中と同じ条件(水溶媒で は水のみ)で Kovalenko-Hirata closure を用いて溶媒和エンタルピーの計算[6]を行った。

solvent	$\Delta H(Expt)$	$\Delta H(Calc)$	$\Delta \mathbf{E}_{\mathbf{prot}}$	ΔH_{solv}	$\Delta H_{solv}^{H_2O}$	$\Delta \mathbf{H}_{solv}^{cation}$	$\Delta \mathbf{H}_{solv}^{anion}$
H_2O	40.0	14.4	557.5	-543.1	-543.1		
1 M NaCl	27.5	9.0 (10.0) ^a	574.9	-565.9	-65.0	3336.5	-3839.4
1 M NaNO ₃	16.5	$0.6(2.7)^{a}$	713.9	-713.3	-156.9	3099.6	-3658.3

 Table 1. Enthalpy data of cytochrome c (in kcal/mol).

^a Solvation enthalpy was calculated with aqueous solution.

【結果・考察】 まず、サンプリングで得られたそれぞれの構造に対して、タンパク 質の構造エネルギー E_{prot} 、溶媒和エンタルピー H_{solv} の和としてエンタルピーH = $E_{prot} + H_{solv}$ を計算した。単量体と二量体のエンタルピー差 $\Delta H = H^{dimer} - H^{monomer}$ は、 全ての溶媒で正となり、単量体がわずかに安定となった(Table 1)。また、溶媒を比較 すると、水溶媒、NaCl 溶液、NaNO₃ 溶液の順に二量体が安定化する結果になった。 これらの結果は、実験結果[1,3]と定性的に一致する。二量体の安定化には溶媒和エン タルピーが重要であり、溶媒和エンタルピーの分割によりアニオンの溶媒和が大きく 寄与していることが明らかになった。また、タンパク質の構造エネルギーはほとんど が静電相互作用エネルギー E_{ES} に起因しており、溶媒によって単量体、二量体の両方 の静電相互作用エネルギーが大きく異なった(Table 2)。さらに、NaCl 溶液や NaNO₃ 溶液でのサンプリングで得られた構造で水のみで溶媒和エンタルピーを計算したが、

もともとの溶媒での計算結果とほ とんど変化しなかった。これらの結 果は、アニオンによりタンパク質の 構造が変化することが二量体の安 定化に重要であることを示してい る。

T 1 1 0	T11	• • •	•	/* *	4 / 4
Toble 7	Llootroctotio	intorootion	oporgiog	(1n	r_{00}/m_{0}
	PRECIDOSIANC	ппетаснон	energies		Cat/mon
10010 -	Dieeuoblaue	monuom	Union Eleo		coul more

	ΔE_{ES}	E _{ES} monomer	E ^{dimer}			
H ₂ O	580.3	-15562.8	-14982.5			
1 M NaCl	562.8	-15163.2	-14600.4			
1 M NaNO3	705.3	-15183.5	-14478.2			

【参考文献】

[1] S. Hirota et al., Proc. Natl. Acad. Sci. USA, 107, 12854 (2010).

[2] M. S. Desphpande et al. Biochemistry, 53, 4696 (2014).

[3] 竜崎 美智子, 奈良先端科学技術大学院大学 修士論文 (2014).

- [4] N.Yoshida, M. Higashi, H. Motoki, and S. Hirota, J. Chem. Phys., 148, 025102 (2018).
- [5] 根木 秀佳, 吉田 紀生, 廣田 俊, 東 雅大, J. Comput. Chem. Jpn., 17, 8 (2018).
- [6] S. Chong and S. Ham, Proc. Natl. Acad. Sci. USA 109, 7636 (2012).